

Vol. 1 を送付して3日以上経過しましたが、まだ琉球新報社から質問への解答をいただけません。解答いただくまでお待ちしたいところですが、いつまでも待つというわけにもいきませんから、話を続けます。

「この図1がなぜ拝殿図に掲載されているかを説明してください。」というのが質問でした。

答えは、「拝殿図は、左右反転した図を誤って掲載している」になると思います。正しくは、図2なのだと考えられます。つまり、94 ページにあった図のうち上(図3)は御庭側から見た形、下(図1)は、正殿側から見た形を間違えて左右反転した図を載せてしまっているのだと考えられます。

写真1は鎌倉芳太郎撮影の写真です。まだ大龍柱の向きを変える前ですから、頭部胴部の正面側にトグロ巻部の尾の先端があります。トグロの巻き方で、図1が間違いで図2が正しいことが分かります。

西村貞雄氏は、この図1が正殿側から見た形の誤って左右反転した図であるとは認識していなかったようです。それは、上下の図の間にある注記が次のように図の正確さを問題にして記述されているだけだからです。

〈拝殿図の阿形側面図であるが、顔面は同一方向を向いているにもかかわらず、前脚の位置付けが曖昧である。〉

西村氏は度々「寸法記」の前脚が間違っていると発言されますが、あれは間違いというよりも、絵図としての表現は、固定的な視点からのものではなく、分かり易い前脚の形を描くだけで、左脚か右脚かを描いているのではなく「脚」を描いているに過ぎないのです。古代エジプトの壁画に描かれた人の足が2本とも親指側から描かれているのと同じです。

こちらの拝殿図は近代の投影法に基づく図ですから、明快にどの方向から見た形かを描いている筈です。それを「寸法記」同様、正確であるかどうかと考えたため、左右反転の図と思いつらなかつたのであろうと考えられます。

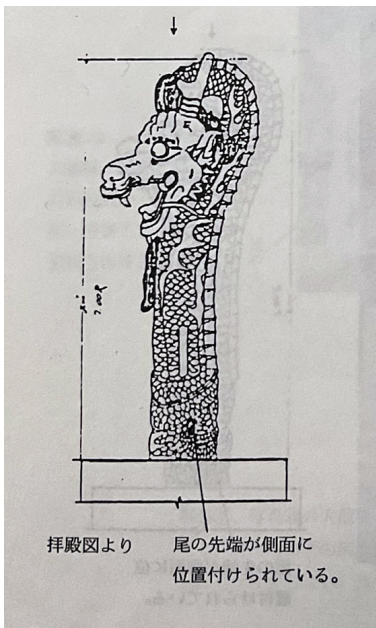


図1



写真1

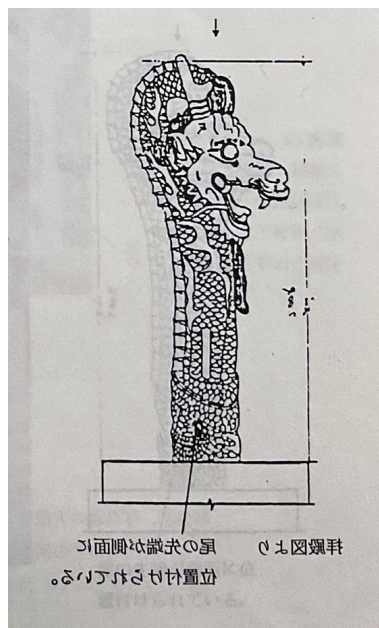


図2



図3

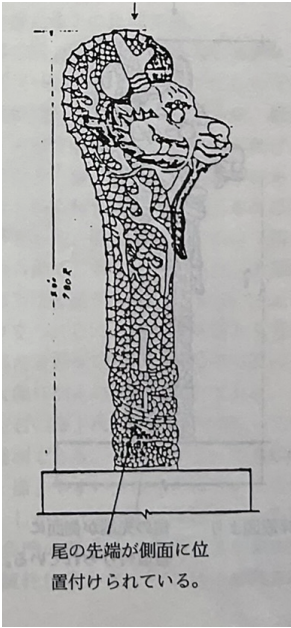


図4

93 ページの吽形大龍柱の図も阿形と同様です。図4は正殿側から見た形が左右反転されてしまった図です。図5が正しい図ということになります。鎌倉芳太郎撮影の写真2のトグロ巻部正面（尾の先端が見える面）のトグロの巻き方で分かります。そして御庭側から見た形が図6ということになります。

この吽形の上（図6）と下（図4）の間に記された西村氏の注記は次のようなものです。
 〈拝殿図より 大龍柱・吽形前脚の上下の位置付けが図のようであれば、下図では顔面の向きは逆にならなければならない。〉

阿形の注記と同様、下の図（図4）が、正殿側から見た形が左右反転されてしまった図であるとまでは認識されていなかったようです。

図6と図7（=図3）が、それぞれ吽形と阿形の大龍柱を御庭側から見た形です。トグロ巻部は背面が御庭側に向いていることが、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵写真（新資料写真）である写真3と写真4で確認できます。そして写真と比較すれば、これらの図が、新資料写真が撮影された後に、破損箇所を漆喰様のもので盛り上げ補修した後の完成時の形を描いた図であることが分かります。



写真2

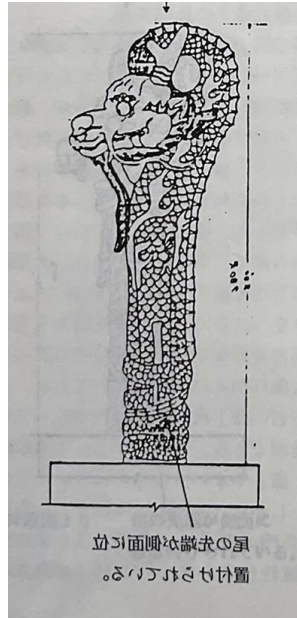


図5

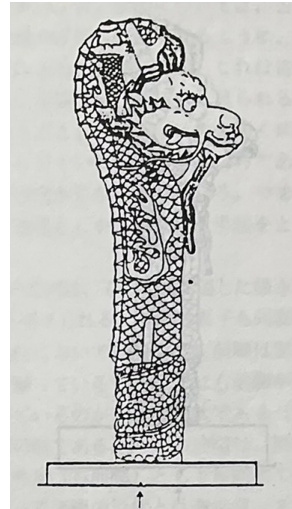


図6

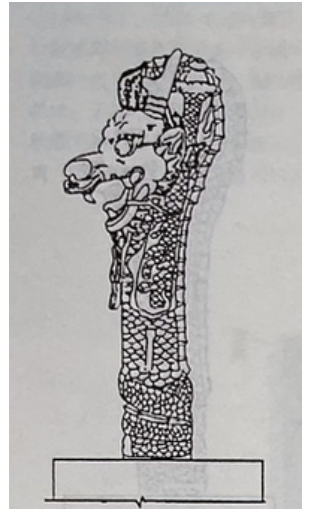


図7



写真3

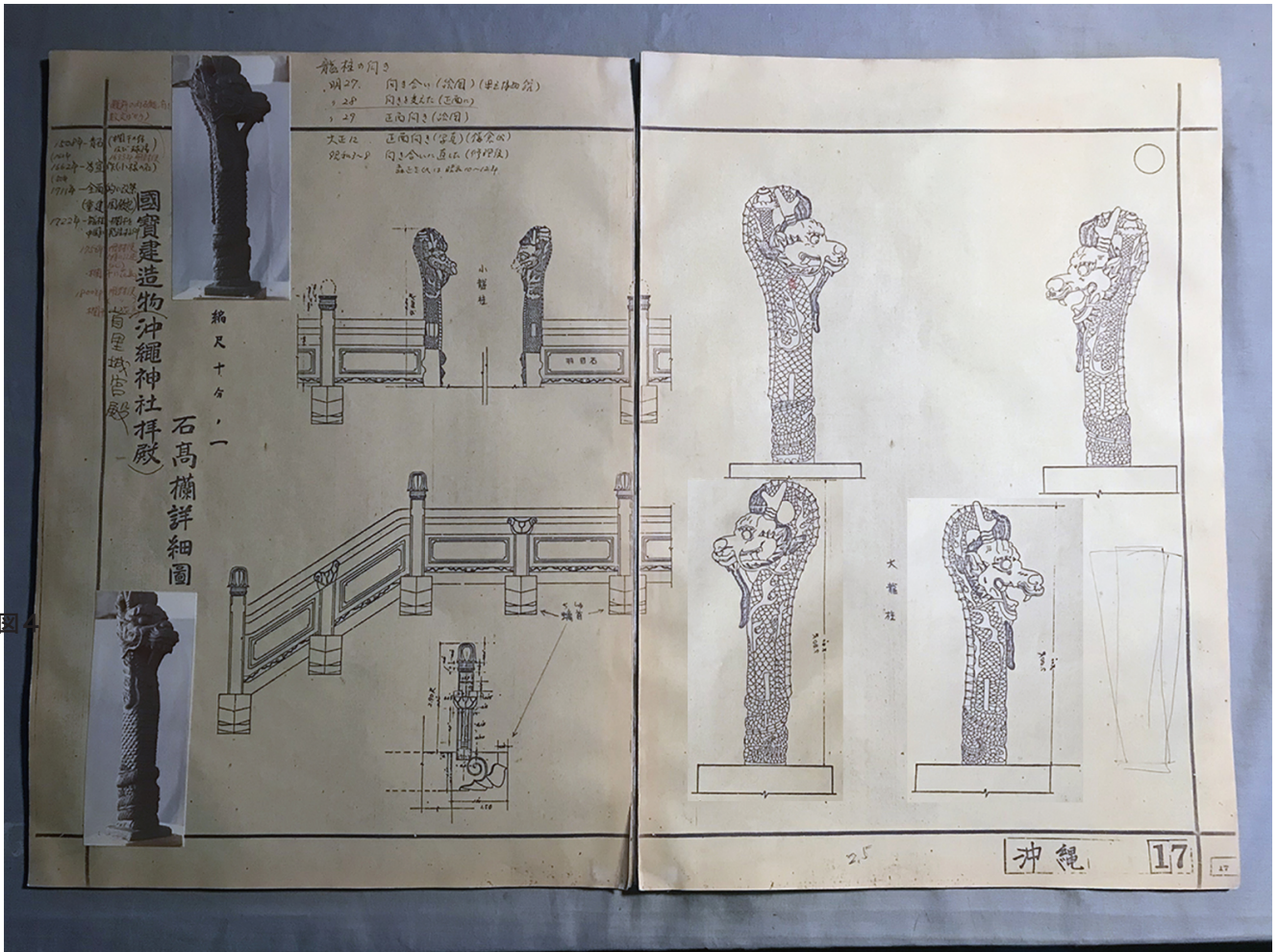


写真4

昭和の大修理の際、拝殿図を描いた方法を推測すると、あの時代ですから、おそらく大龍柱の写真を正面や側面、背面から撮影し、その写真をトレースし、輪郭線を拾っていつて作図したのだろうと思われます。

最終的に、それらの図を青写真の拝殿図としてまとめ上げるときに、なんらかの錯誤が生じ、正殿側からの図が阿形・吽形共に裏返しに使われてしまった可能性が高いと思います。

写真3及び写真4は東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵



國寶建造物沖繩神社拝殿 石高欄詳細圖の拝殿側から見た阿形・吽形大龍柱の図（下の二図）を修正

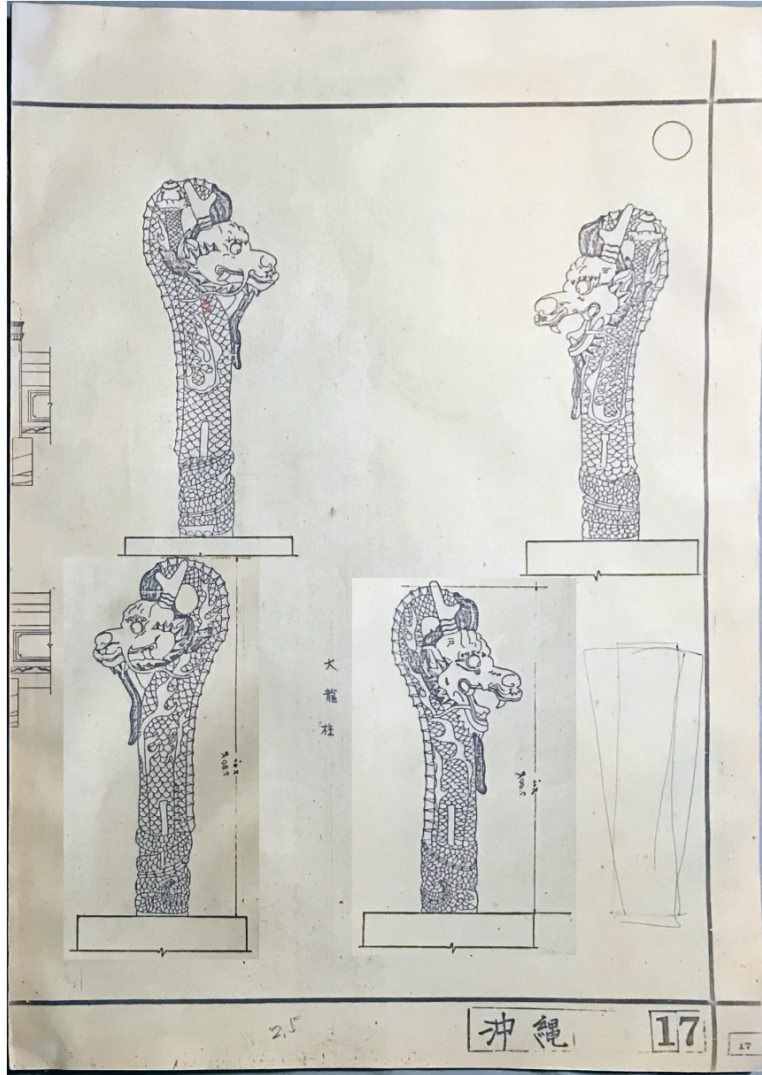
そこで、西村氏所有の拝殿図を撮影した写真を、正殿側からの図の正しいものに置き換え修正してみました。拝殿図がこのような間違いなく作成されていたなら、新資料写真が発見される以前から、大龍柱の阿形・吽形とも沖繩神社拝殿への改変の際にトグロ巻部は180度向きを変えられていた事実が広く認識されていた筈です。

西村貞雄『首里城正殿・大龍柱の「向き」についての考察』の92ページには、〈動体部を無くした大龍柱は、下部の巻き付け部分が1/4回転ずらした状態で据え付けられ、坂本万七の阿形の後面写真（写真⑦）の下部巻き付け部分は、本来は右側面に当たる箇所である。〉と記されていますが、一方で、94ページの拝殿図の上下の阿形大龍柱の図の間の注記では、〈拝殿図の阿形側面図であるが、顔面は同一方向を向いているにもかかわらず、前脚の位置付けが曖昧である。〉と記されています。

「坂本万七の阿形の後面写真の下部巻き付け部分は、本来は右側面に当たる箇所」であれば、下部巻き付け部分（＝トグロ巻部）の正面（尾の先端のある面）は正殿側に来ている筈であり、それならば、拝殿図の図について「前脚の位置付けが曖昧」と図の正確さを問題にするのではなく、この図が正殿側から見た形を描いたものを誤って左右反転した状態で記載されていることに言及しなければ、形態についての統一的分析になりません。

ただし、こういうことが言えるのは、新資料写真によって、トグロ巻部が180度回されたことが事実として分かった今であるから明快になったことなのです。

西村貞雄「首里城正殿・大龍柱の「向き」についての考察」の「本来は右側面に当たる箇所である」が、この紀要論文全体の文脈の中で、「そこまで明快なものではない」という意味、そして、「右側面を大龍柱に向かい合わせに立った時の右側」と思い込んだ要因はここにもあるのです。



琉球新報「誹謗中傷」記事への抗議：対話のための資料 Vol. 2

著者：永津禎三

自家版 2022年11月30日発行